

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

（都合上、本文は一部変更してあります。）

ぼく（枝田光輝、あだ名は「えだいち」）は運動も勉強も苦手な、取り柄のない男の子。学校では特に話すこともなく、友だちもいなかった。しかし、五年生になって、押野という活発な少年と同じクラスになる。この全く正反対の性格の押野に引つ張られるようにして、教室でも少しづつ話すようになり、放課後も友だちと遊ぶようになる。三丁目の空き地で生まれて初めて野球をしたり、押野の家に行ったりした。押野によって自分が変わってきて、世界が広がるうとしていく。

ぼくがようやく、クラスメイトの顔を覚えたころ（名前と顔はなかなか一致しないのだけど）に、はじめての学級会があった。すでに決定していた男女二人ずつの学級委員が司会をしたり、書記をしたりして進行していった。

今日のギダイは、「委員決め」だ。クラス全員に「委員」と名のつく役があたえられて、それぞれに仕事をあたえられるのだ。「保健委員。図書委員。新聞委員。レクリエーション委員。飼育委員。音楽委員。花壇委員。七種類の委員があります。それぞれ四人ずつです。まずは希望者から決めたいと思います。早い者勝ち！」

押野がてきぱきと進めていく。こういうとき、人前でも物怖じしない押野を、ぼくは本当に尊敬してしまうのだった。

人気があるのは保健委員で、これはすぐに決まった。女子のほとんどが手をあげて、結局最後はジャンケンだった。レクリエーション委員は、何かの行事のときに絵を描いたり、壁に貼る時間割りや目標なんかを模造紙に書いたりする。ぼくは字も下手だし、まして絵なんてとんでもないので、これはパス。

音楽委員はテレビをつけたりカセットをかけたりする役割でアングイ楽。でもみんなに「静かにしてください」とか言わなければいけないから、これもパスしたい。図書委員は教室にある本の管理とかおすすめの本を紹介するといったハイレベルな

仕事内容なのでこれもパス。新聞委員は、月に一度壁新聞を作るといいう、これまたハイレベルな仕事なので、当然却下。

残るは飼育委員と花壇委員だ。このふたつは下手すると休みの日まで、学校に出なくてはならないけど、でもぼくには合っていると思った。花壇委員は女子っていうイメージだから、狙いは飼育委員だ。

どうかだれも手をあげませんように。と祈りながら、押野が「飼育委員やりたい人」と言ったと同時に思いきって手をあげた。

「えだいち決まり」

と押野がぼくを指して言った。あとの三人もすぐに決まった。押野がぼくを見て目配せしたような気がした。本当は希望者がもう一人いたのだ。ぼくは目の端にそれを見たけど、見なかったふりをした。手をあげるのが一瞬遅れたのだ。きっと押野も気づいていたはずだ。ぼくは、そいつに悪いなあ、と思いながらもほっと（A）をなでおろした。

「仲のいい友達ができたんだ」

その日の夕食は、母さんの得意な鶏肉の団子汁だった。汁の中には、にんじんやじゃがいも、ブロッコリーなんかも入っていて、エイヨウは満点だったけど、ぼくはあんまり好きじゃなかった。ご飯のおかずにならないような気がして、たいていは結局、汁の中にご飯をぶちまけて、雑炊のようにすすって食べてしまう。それを見ると、母さんは「ねこまんまね」といつも言う。

母さんは、減農薬野菜や有機野菜にこだわっていた。けれど、そういう野菜は値段が高くて、母さんが財布の中身と相談して、結局は買わないことが多いのをぼくは知っていた。

「へえ、よかったわね。なんていう名前の子？」

ぼくは、やっぱりご飯を団子汁の中に入れた。

「押野」

「押野、なんていうの？」

母さんは、ねこまんまね、と言わずに押野の下の名前をきいてきた。

「ヒロヤかな」

「どういう字書くの？」

どうして？ と思ったけど、ぼくはそうきかずに、ヒロヤという漢字を教えてあげた。母さんは、ふうんと言いながら、広告の裏に押野の名前を書いた。それから、しばらく何やらごちゃごちゃと書きこみ、ぼくがずっずっずと大きな音をたてたのをしおに顔を上げて、ようやく「ねこまんまね」といつものように言った。

「よく野球して遊ぶんだ。押し入れにあったグローブ出したよ」

「ああ、あれ。よく見つけたわね」

母さんは、ぼくの机の上に置いてあるグローブを眺め、そう言った。

「あれ、近所のお兄さんがくれたんだよね」

母さんは、少し考えたような顔をしてから「さあ、忘れちゃったわ」と言った。

母さんは、食事中にテレビをつけることをきらったから、我が家の食卓はいつも静かだ。外の通りを車が通ると、エンジンの音がよくきこえて、台所の窓ガラスがオレンジ色に変わる。

隣の人の声^{とまり}がきこえることもよくあった。何を言っているのかまではわからなかったけど、うち以外からきこえてくる声は、いつでもぼくを、さらにしんとした気持ちにさせた。母さんと二人きりの夕食は、ぼく一人で食るときよりもずっと一人きりのようだった。

ぼくは、押野の家を思い出した。きつと騒^{さわ}がしい夕食にちがいないだろうと。

「母さん、ぼく、バットが欲しいんだ」

ぼくの声は、ちょっと場ちがいみたい^{せま}にアパートの狭い台所に響^{ひび}いてしまって、言ったぼくのほうが少し困惑^{こんわく}した。

「バット？」

と、母さんは言った。まるでバット自体を知らない人^④みたい^④に。たぶんそれが、ぼくにとって最初で最後のおねだりだったと思う。

食べるものや着るものに困ることはなかったけど、うちが経済的にけっして裕福でないことはだれに教えられることなく、自然とわかっていた。だから、口に出すときは少し緊張^⑤したけど、べつに悪いことだとは思わなかった。

母さんはぼくを静かに見て、それからくたびれたグローブを見た。

「もちろん、いいわよ。バットを買いましょう」

母さんが目を細めて言った。「それはとてもいい考えね」という感じの言い方だったから、ぼくは安心した。

「野球が好きだなんて知らなかったわ」

「うん。ぼくも知らなかった。でも、ぜんぜんできないんだ」

⑥くすつ、と母さんは笑った。

バットはつぎの日、すぐに手に入った。朝、母さんが封筒^{ふうとう}にお金を入れておいてくれたからだ。放課後、ぼくは押野を誘^{さそ}って、近所のスポーツ用品店へ行った。封筒には一万円札が入っていた。

「おい、すごいな。一万円だって」

「うん」

ぼくは、押野やお店の人にきいて、結局四千八百円^{なんしき}の軟式用バットを買った。

「えだいちのがいちばんいいバットだぞ」

と、押野が言って、「ホームラン打てよな」とぼくの尻をぱーんとたたいた。

茶色の土ときびたフェンスの空き地の中で、ぼくのバットはひととき目立った。バットはまさに新品のピカピカでバットだけが宙に浮いているみたいだったけど、それはぼくの自信へとつながった。みんなにバットを見せろと言われ、打てよ、と肩をたたかれ、ぼくは期待に^{こた}応えようとバッターボックスに立った。

足に力を入れて、ピッチャーが投げてくる球に集中した。

しゅっ。

空振り。くるっと一回転してしまった。だれかの笑い声がきこえる。ぼくは体勢を立て直して構える。

「尻をひっこませ」とだれかが言って、へっぴり腰を持ち上げた。

しゅっ。

また空振り。バットが抜けそうになってしまった。あと一球。

「ケツの穴をしめろ」

ぼくはきゅっとお尻の穴をしめた。

カーン。

と、いい音がした。ファウル。押野がセカンドで、ひゅうっと口笛を吹く。ぼくたちの野球は人数がそろわないこともあって、チームに分かれるなんてことはほとんどなくて、ただ順番に手があいているやつが適当に好きなポジションにつく、という程度のものであった。(B)、ぼくがバッターボックスに立ったとしても、応援してくれるのは内野の守備をしている人たちだ。

カーン。

またファウル。だれかが何かを言う。

カキン。

ボールが新品のバットにかすめて鋭い音がした。

「走れ! まわれ!」

ぼくは思いきり走った。それこそ、^⑨ここで死んでもいいくらいの心意気で。

「アウト!」

だれかがでかい声で言う。アウト。そんなことはもちろんわかってる。だってぼくが走りはじめたときには、ボールはもうファーストのグローブの中にあっただから。

膝に手を置いて、はあはあと息を切らしているぼくに、押野が「やったじゃん!」と声をかけてくれた。

「うん」

「やっぱ、バットのおかげだな」

確かにそうかもしれない。ファウルふたつにピッチャーゴロひとつ。これはぼくにとって奇跡的な数字だった。だって、何しろ、バットにボールが当たったのは、今日がはじめてだったのだから!

ぼくは、ボールがバットに当たったときの自分の手のひらの感じを思い出して、ものすごくうれしく思った。ファウルやピッチャーゴロはぼくにとっての満塁ホームランくらいの価値があるのだ。当たったことだけでもすごいのに、それがほんの少しであれボールが飛んだのだから。ぼくは、まだじんじんしている手のひらをこすり合わせた。さっきの手ごたえを惜しむように、照れくささをかくすように。

その日の夜、封筒の中におつりといっしょに手紙を入れた。手紙といっても、電話のところに置いてある、郵便局でもらったメモ用紙に書きつけただけのものだったけど。

母さんへ

バットを買ってくれてありがとう。かつこいいから、みんながうらやましがっていました。だいに使います。今日のはじめで打てました。三回打てました。おつりとレシート入っています。

光輝

その日は母さんから、今日は帰りが遅くなるから先に寝てて、という電話があったから、ぼくはバットのお札をメモに書いたのだ。これだけ書くのにも、四枚もメモ用紙を無駄にして一時間以上もかかってしまった。ぼくはそれを何度も読み直して、まちがいないことを確認して、なかなかよく書ける、と自分ながらに少しばかり感心し、今日はとても良い日だったと思って、布団に入った。

バットは少しずつぼくの手になじんできて、毎回、最低一回はボールがバットに当たるようになった。もちろん、ファウルやピッチャーゴロばかりだったけど。それでも、ぼくは飛び上りたくなるほどうれしかった。

ボールがバットに当たったときの、腕がしびれるような感覚が好きだった。もつと遠くに、もつと身体全部がしびれるように打ちたくて、ぼくは三丁目の空き地に通った。

「えだいち、球をよーく見なくちゃだめだ。最後の最後まで球から目を離しちゃだめなんだ」

空振り三振をしたぼくに、じやらしがアドバイスしてくれる。じやらしは、すごいバッターで、毎回必ずホームランを打つと言ってもいい。力があるから、当たるとすごい。球が気持ちいいほど高く遠くへ飛んでゆく。青空に吸いこまれちゃうんじゃないかな、とぼくはいつも思う。

押野は、打つよりも守備がずば抜けていた。ファーストでもセカンドでも外野でもどこにいたって、必ず正確にキャッチして、正確に投げる。捕るのも苦手なぼくにだって、ちゃんと捕れる球を投げてよこしてくれるのだ。それに、押野はなんとい

っても足が速かった。バントをすると絶対的な確率で一塁セーフになった。ピッチャーのミスで、あやうく二塁まで走れそうなきすらあった。

彼らの動きを追っているだけで、ぼくは最高にたのしかった。見ていて、気持ちよくて、（A）がすかつとした。みんなは適当に交代して、ピッチャーをやったり守備についたり、バッターボックスに立ったりしたけど、ぼくは打つことだけにしていた。何回か、守備についたことはあったけど、やっぱりんでだめだった。フライをおでこに当てたり、トンネルをくりかえしたりで、「マンガみたいだな」とみんなに笑われた。投げれば投げたで、球が相手まで届かなかったり、信じられないだろうけど、真後ろに飛んだりもした。

一度、一塁に投げようとした球がキャッチャーの頭を越えて飛んでいったことがあって、自分でもびっくりしてしまった。もちろんみんなは大爆笑で、押野にいたっては「しょんべんちびったあ」とまで言いながら、涙目で草むらを駆けまわっていた。ということ、ぼくは、最低ながらもぼくの中ではたぶんいちばんまともなバッターとしてしか参加しないのが常だった。

学校はたのしかった。自分がきちんと学校に通って、授業に参加しているんだ、というあたりまえのことを誇らしく思った。もちろん、それは押野のおかげだった。何しろ、去年までは一日の間にクラスメイトのだれとも一度も話さなかったときだった少なからずあったのだから。

（椰月美智子『しずかな日々』より）

問1 ——— ⑦「ギダイ」・④「模造紙」・⑦「アングイ」・④「目配（せ）」・④「エイヨウ」のカタカナは漢字に直し、漢字はよみがなを付けなさい。

問2 (A) に共通して入る最も適切な語を、漢字一字で答えなさい。

問3 —— ①「母さんが財布の中身と相談して」とありますが、「財布の中身と相談」とするとはどういう意味ですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア お金を出せるか確認する。 イ 財布の残金を確認する。 ウ お金のありかを確認する。
エ 財布の重さを確認する。 オ お金を数えて確認する。

問4 —— ②「大きな音をたてたのをしおに」とありますが、この「しお」と同じ意味を表すものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ひとしお イ しおどき ウ みちしお エ ひきしお オ しおさい

問5 —— ③「うち以外からきこえてくる声は、いつでもぼくを、さらにしんとした気持ちにさせた」とありますが、それはなぜですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア うちのことを悪く言っているような気がしたから。
イ ぼくはその声がどうしてもたえられなかったから。
ウ うちの中で静かにしていることがとても大好きだったから。
エ うちの静かさをさらに強調するような気がしたから。
オ うるさい声は何を言っているか気になってしまいうから。

問6 —— ④「まるでバット自体を知らない人みたいに」とありますが、母さんはバットを知らないわけではありません。ではなぜこのような表現がされているのですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ぼくの発言があまりにも失礼だったから。 イ ぼくの発言があまりにも予想外だったから。
ウ ぼくの発言があまりにも効かったから。 エ ぼくの発言があまりにも大きな声だったから。
オ ぼくの発言があまりにも難しいことだったから。

問7 —— ⑤「口に出すときは少し緊張した」とありますが、「口に出すとき」に「少し緊張した」具体的な内容はどのようなことですか。本文中から七字で抜き出して答えなさい。

問8 —— ⑥「くたびれたグローブ」とありますが、「くたびれた」の意味として、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア みすばらしくなった。 イ くたくたに疲れた。 ウ 小さくなってしまった。
エ 捨てられていた。 オ お兄さんにいただいた。

問9 ——— ⑦「くすつ、と母さんは笑った」とありますが、なぜ「母さんは笑った」のですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア バットを買っても下手だからどうせ使わないだろうと思ったから。

イ 将来、野球選手を目指そうとする息子の姿に感動したから。

ウ いつものような冗談をまた言っているのだと思ったから。

エ 母さんも野球が好きだけどぜんぜんできないから。

オ できない野球をするという息子をほほえましく思ったから。

問10 ——— ⑧「ぼくのバットはひときわ目立った」とありますが、その様子をどのようにたえていますか。本文中から十字で抜き出して答えなさい。

問11 (B)に入る語として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア しかし イ また ウ そして エ たとえば オ だから

問12 ——— ⑨「ここで死んでもいいくらいの心意気で」とありますが、この後続くべき言葉を本文中から十字以内で抜き出して答えなさい。

問13 ——— ⑩「押野が『やったじゃん!』と声をかけてくれた」とありますが、それはなぜですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ピッチャーゴロでアウトになったから。 イ 新しいバットを買ってもらったから。

ウ 今日はじめて野球をすることができたから。 エ バットにボールがはじめて当たったから。

オ 満塁ホームランを打つことができたから。

問14 ——— ⑪「ボールがバットに当たったときの自分の手のひらの感じ」とありますが、それはどのような感じとして残っていますか。本文中から八字で抜き出して答えなさい。

問15 ——— ⑫「それ」とありますが、「それ」が指す内容を表している部分を本文中から十字以内で抜き出して答えなさい。

問16 この文章の内容として正しいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア ぼくは、「委員決め」をするときの押野の態度は少し強引過ぎると思った。

イ ぼくは、鶏肉の団子汁ばかり出る母さんと二人きりの夕食が好きではない。

ウ ぼくは、バットを買うことによって野球を好きになってしまった。

エ ぼくは、ホームランが打てなくても守備がうまければいいと思っている。

オ ぼくは、何もできないけど、三丁目の空き地に行くことが大好きだ。

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(都合上、本文は一部変更してあります。)

受験戦争。なんといやな言葉でしょう。

ほんとうの戦争ならば、敵があるはずです。けれど、実際には銃をとって戦わない受験戦争の敵は、いったい誰なのでしょう。高校または大学では、その学校の教育施設に見合うだけの生徒数を決めていきますから、応募数の多い学校を目ざしたとき、その競争相手があなたの当面の敵となるわけでしょうか。とすると、仲のよい友だちと同じ学校に進みたいと思ったとき、仲のよいその友だちが敵になってしまいます。そんな悲しいことはいやですね。

“よきライバル”という言葉がありますが、競い合う相手がいることは、自分のためにも相手のためにも **A** ことです。けれども、競うことだけが目的になってしまった場合、結果は勝つか負けるかしかなくて、そこには、おたがいを高めあう魂の交流はなくなってしまいます。同じとしごろの仲間と心が通じ合わなくなる……。なんと **B** ことでしょう。

自然の法則としては、人間は年齢の順に死んでいくのです。むろん、長寿の家系に生まれても、不測の交通事故などで若死にすることもあり、年齢順に死ぬなんてキカイ的な仮定ではありますが、私やあなたたちのご両親が、あなたたちより先に死ぬことのほうが、生物学的にみて自然である、という意味で言っているのです。

さて、そのように、人間は順を追って死んでゆき、あなたたちの世代が日本という国を左右する年齢に達したときのことを考えてください。同年代がすべて敵であったり、相手の考えが理解できないままであったら、日本はどうなってしまおうのでしょうか。そしてあなたたちの子どもは、誰の手によってそのまたつぎの世代をになうように育てられていくのでしょうか。 **I**

大人になれば、いやおうなく大きな人間関係にまき込まれてゆきます。そうしたなかでいつまでも相手の心がわからない大人子どものままでいられるわけがありません。 **A**

幼稚園のときから勉強勉強と邁進し、高成績をおさめて、みごと一流大学に合格したとたん、がっくりきたり、その大学で

なにを学ぶのかわからなくて、心を病む大学生が増えつつあるのを見ると、私は心が痛んでなりません。また、大学に入っ
ようやく受験戦争から解放され、心を病む代わりに、いままでの代償として思いっきり遊ぶ若者も増えていきます。心を病む
人たちより、タフだといえるかもしれませんが、社会は社会のハッテンに確実に役立つ若者を求めているという現実につか
ります。就職です。これもみごとにナンカンを突破して、一流企業に入れる優秀な若者がいます。ところが今度はそこで適
応できない人がでてきます。そうした若者の例を見ると、人とのつき合いで訓練ができていない人が多いようです。 **B**
そこで、社会に出てから、あらためて人間としての教育を再訓練されるのが最近ではふつうのようになってしまいました。
もう学生ではありません。その会社の一員として働き、働きに見合ったおキウリヨウをもらうのですから、いままでのよう
な甘えは許されません。大多数の若者は、企業の人間教育にたいして、そういうものかと納得し、 **II** あきらめたりして
適応していきます。けれども、そんなはずではなかったと逃げ出したり、心を病んだり、ときには自殺者を出したりすること
もあります。

III、きびしい受験戦争に勝ちのこった者にしあわせな将来が約束されるという思い込みは、ある部分、幻想だと思って
ください。 **C**

それは、企業が企業のためにする教育でも、学校がしてくれるものだけではありません。生まれたときから、成長していく
過程で、ていねいに身につけていく、生きていく心構えなのだと思います。

生きていく心構え——など、中学生や高校生にはむずかしすぎると思わないでください。 **IV** 朝の挨拶、食事の前後の

挨拶だって、人間教育のもっとも基本的なものなのですから。 **D**

学校とは、勉強だけ教えてくれるところではありません。いろいろな個性をもった子どもたちが集まり、クラスを編成し、
学年を構成していったって、その全体のなかで自分を発見する場でもあるのです。

自分の発見とは、数学はA君より劣るけれど国語力は自分のほうが優れているとか、成績にはあまり自信はないけれど、い

ざというときクラスをまとめるにはぼくがいなくてはとても無理だ、とかいうこともあるでしょう。級友と論争をしてみても、意外と自分に説得力のあることに気づくなど、一人で勉強部屋にこもっているだけではわからないことが、たくさんあるはず⑩です。学校とは、本来、ランクづけのためにあるものではありません。でも、現実には五段階、あるいは十段階方式で、あなたたちの能力は評価されます。【E】

私自身、また私の息子も、学期末に手渡されるその評価表を見て、落ち込んだり、とび上がって喜んだりした覚えがあります。でも、私たち母子が、あまりその評価に左右されずに過ごしてこられたのは、いつまでもとらわれてはいない性格にもよるのでしょう。ときにはその評価に不満をもったこともあります。V、世の中には、絶対ということはありえないのだから、これが正しいと思うのはよそうと負け惜しみ^おを考えたり、思いがけずよい評価のときは、みんなドジ^おったな、とほかの人のことを考えたものでした。いずれにしても、これは一つの目安である、だから、あとは自分が努力するかしらないかによって、来学期はまた変化するものである、と考えていました。

(小山内美江子『21世紀を生きる君たちへ』より)

語注 *不測……予測できないこと。

*適進……ひるまず突き進むこと。

*代償……ある目的を達成するために支払ったり、失ったりしたもの。

*タフ……強靱^{きやうじん}な。粘り強い。

問1 —— ⑦「キカイ」・⑧「病(む)」・⑨「ハッテン」・⑩「ナンカン」・⑪「キュウリョウ」のカタカナは漢字に直し、漢字にはよみがなを付けなさい。

問2 [I] [V] に入る最も適切な言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ言葉は二度使いません。
ア だから イ でも ウ たとえば エ もちろん オ あるいは

問3 [A] [B] に入る適切な言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。
A ア やさしい イ たのしい ウ うれしい エ すばらしい オ つまらない
B ア おそろしい イ なさけない ウ むずかしい エ はずかしい オ わずらわしい

問4 本文中から次の一文が抜けています。その一文が入る最も適切な箇所を、本文中の【A】～【E】の中から選び、記号で答えなさい。

・では、人間教育とはなんでしょう。

問5 —— ①「結果」の対義語を漢字二字で答えなさい。

問6 —— ②「そのように」とありますが、「その」とは、何を指していますか。本文中から当てはまる部分を四十字以上四十五字以内で抜き出し、最初と最後の五字(句読点は含まない)を答えなさい。

問7 —— ③「左右する」とは、どういう意味で使われていますか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア そばに置く イ 世話をする ウ 仕える エ 動かす オ 支配する

問 8 ——— ④「そうした」とありますが、「そう」とは、何を指していますか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 大人になること。 イ 大きな人間関係になること。 ウ 大人子どもになること。
エ つぎの世代をになうようにそだてられていくこと。 オ 大きな人間関係に巻き込まれていくこと。

問 9 ——— ⑤「大人子ども」とは、どういう意味ですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 大人と子ども イ おとなしい大人 ウ おとなしい子ども
エ 大人のような子ども オ 子どものような大人

問 10 ——— ⑥「そうした若者」とは、どういう若者だということです。それを説明した次の文に当てはまるように本文中の言葉を抜き出して答えなさい。ただし、() 内の字数とします。

- ・(A 4 字) の中で (B 6 字) 若者。

問 11 ——— ⑦「企業の人間教育」とは、どのような教育のことを言っていますか。それを説明した次の文に当てはまるように本文中の言葉を抜き出して答えなさい。ただし、() 内の字数とします。

- ・人間としての教育ができていない学生に、あらためて (A 7 字) 方を (B 2 字) するということ。

問 12 ——— ⑧「学校とは、勉強だけ教えてくれるところではありません」・⑨「学校とは、本来、ランクづけのためにあるではありません」とありますが、では筆者は学校はどんなところだと言っているのですか。本文中から八字で抜き出して答えなさい。

問 13 ——— ⑩「これ」とは、何を指していますか。本文中から抜き出して答えなさい。

問 14 問題文の内容と合っていないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 仲のよい友だちと同じ学校に進みたいと思ったとき、仲のよいその友だちが敵になってしまう。
イ 幼稚園のときから勉強に邁進し、一流大学に合格し、一流企業に入れる優秀な若者は人とのつき合いで訓練ができている人が多い。
ウ きびしい受験戦争に勝ちのこった者にしあわせな将来が約束されるという思い込みは、ある部分、幻想である。
エ 人間教育とは、生まれたときから、成長していく過程で、ていねいに身につけていく、生きていく心構えである。
オ 学校とは、本来、ランクづけのためにあるものではないが、学期末に五段階あるいは十段階方式で能力が評価されるのが現実である。